



「日本列島四季の花火」－⑨「全国デザイン花火競技会エレクトリックミュージカルワイド花火競技会」山形県 鶴岡市「赤川花火大会」 写真・文：泉谷玄作

赤川の花火大会は、今年は8月10日開催で、全長2kmに渡る赤川河敷の兩岸に打ち上げ場所と観覧席を配したワイドな会場で、今年は総数約13,000発を予定している。600mにも及ぶ広大な打ち上げ幅と割物全国デザイン花火競技会、エレクトリックミュージカルワイド花火競技会などがある。今年で16回目を迎えるが、全国でも屈指に数えられている。

全肢連全国大会

会長 菅原 三朗

全国肢体不自由児者父母の会連合会（全肢連）の全国大会が、今年度は東海北陸ブロックの担当で、6月17日（土）18日（日）の2日間に亘って石川県金沢市の「石川県立音楽堂コンサートホール」において開催された。

障害者福祉のあり方を全面的に見直した「障害者自立支援法」が実施されていく今、全国から約1,000名の会員と関係者が一堂に会し、より障害の重い者達のより豊かな社会参加の実現を目指した福祉環境の確立と福祉制度のあり方や父母の会活動等について熱心に討議した。

3年前、行政がサービスを提供する「措置制度」から、利用者自らがサービスを選んで事業者と契約する「支援費制度」に移行したが、国の利用者見込みを大きく越えた利用者の急増で財

政は悪化し、又基盤整備の遅れと地域格差も否めず、国は施行後わずか1年で介護保険との統合や今後の障害保険福祉施策の、グランドデザインを示唆し新法制度へと動き始め、示唆されてから半年足らずで国会上程となったが、審議中に郵政法案否決で国会解散のあおりで廃案となり、その後衆院選挙での自民党圧勝を受け、「障害者自立支援法」は特別国会に再提出され可決・成立となったがこの1年間、障害者の福祉よりも財政施策優先の猫の目行政に大きく振りまわされることとなった。

「障害者自立支援法」の施行により、障害種別ごとに分かれていた障害者福祉制度や施設体系等による施策が複雑との批判があったものが見直され、制度の対象外であった精神障害者も同じ制度を利用できるようになったのは利点の一つと言われている。しかし障害程度区分の導入や施設・事業体系の再編による影響がいまだ未知数である。また3年間の経過措置として負担軽減が示されてはいるが、利用者の所得に

よる応能負担からサービスごとに原則1割負担とする定率負担への移行は、重度障害者の切捨てにつながるわが国の福祉政策の誤った転換を強く印象づけ不安をぬぐい去ることができない。また独自の軽減措置を行う自治体もあり、更なる地域格差が生じ始めている。

経済事情が「自立」を阻むとしたら、制度の大義名分は完全に崩れ去る。3年後の制度の見直しに向け、介護保険との統合や扶養義務、所得保障等を含め、問題・課題を詳しく検証して敏速早急に対応していくことが絶体必要であり、今回の大会でもこのことが強く打ち出された。

父母の会活動も、地域での運動の重要性とともにその存在意義が益々問われてきている。会員や障害者のニーズを集約し、行政に対して粘り強く運動を行っていくとともに、障害の重い者達も誰もが生きがいを持ち、安心した地域生活を送ることができる環境整備の実現のため更なる活動を展開していくことの重要性を痛感した。

新規学卒者 研修会を開催

建設業界と新入社員の基礎知識
建設業のIT化等を学習

県協会では、平成18年度新規学卒入職者（新入社員）研修会を5月22日23日の2日間にわたり、秋田ビューホテルにおいて開催した。研修会には、この春会員企業に採用された新入社員19人が参加。初めに嶋貫専務理事が「建設業の一員として社会に第一歩を踏み出された皆さんはどんなに厳しい状況の中にあっても若者らしいはつらつとした新しい感性と行動力でこの難局を乗り越えていただきたい。自分の為、社会の為、一日も早く資格を取得し会社の皆さんとのコミュニケーションをよくして一人前と認められるよう

努力を重ねていただきたい。」とあいさつした。

続いて菅原会長の講話があり「自分の生きかた、人生観、世界観、社会人としての職業意識、目的をきちんと考えたうえで、建設業で果たす役割をきちんと認識して頑張りたい。職業がなんであろうと最後は人格の完成、りっぱな人間として一生を送るのが人生最後の目的であり、『恒産あれば恒心あり』という一心不乱な心構えを持っていただきたい。今のところ大企業と中小企業の格差、大都市圏と地方、都市と農村という格差が日本の景気の回復と同時に日本社会に大きく現れてきております。皆さんも世の中のこと、産業、会社のことをきちんと勉強して有意義な人生を送っていただきたい。」と話があった。

研修会では(株)日本コンサルタント

グループの酒井誠一氏を講師に迎え、◇社会人としての心構え◇建設業界の基礎知識◇新入社員の基本（身だしなみ、発声練習・挨拶、敬語の使い方、電話対応）◇チャレンジプランの作成（自分の挑戦課題は何か、個人別課題の検討、決意表明）について講義を行った。

二日目は本協会職員の今野主事より◇建設業界のIT化◇秋田県CALS/ECの動向◇業務の流れと電子化への対応について説明があり、Windowsの基本操作を行った。



建災防秋田県支部

全員参加でリスクの低減 確立しよう「安全文化」

平成18年度 秋田県建設産業安全衛生大会

建設業労働災害防止協会秋田県支部（菅原三朗支部長）は、6月19日、秋田市文化会館において“全員参加でリスクの低減 確立しよう「安全文化」”をスローガンに平成18年度建設産業安全衛生大会を開催、関係者217名が参加した。

大会では、労働災害により亡くなられた方へ対し、参加者全員による黙祷が捧げられ、続いて、北林一成副支部長が挨拶。建設投資減少等の厳しい状況下、安全衛生管理部門の縮小、教育投資の手控えなどによる安全衛生活動への取り組み意欲の減退、安全衛生意識の低下等に懸念を示し、こうした環境でこそ安全衛生運動の原点に立ち返った上での安全衛生意識を高揚していくことが大切であると述べた。

続く表彰式では、建設業における労働災害の防止に特に貢献された事業場及び個人に対する表彰として、事業場賞で19事業場、個人賞では功労賞で2名、功績賞で1名、職長賞で9名が建災防秋田県支部長表彰を受賞した。

また、来賓には江原由明秋田労働局長、宮崎伸一郎秋田河川国道事務所副所長、佐賀伸和秋田県建設交通部次長が参列、祝辞を述べた。

講演では小田銀治氏（建設業労働災害防止協会 事業部調査役）を講師に招き、「夢・COHSMS—そして安全—」と題し、建設業におけるCOHSMSや、建設従事者教育、各種安全衛生活動の手法・取組について講話が行われた。

そして大会の終わり、近藤喜幸秋田左官業連合会長が「安全の誓い」を読み上げ、参加者一同、職場のリスク低減並びに快適な職場環境の形成を目指すことを誓った。



県協会

国土交通省 06年度建設マスター 本会推薦の受賞者2名

国土交通省は5月30日、優れた建設技術者を顕彰する優秀施工者国土交通大臣顕彰（建設マスター）式典を東京都のメルパルクホールで行った。

同顕彰制度は第一線で「ものづくり」に携わっている方の中から、優秀な技能・技術を持ち、後進の指導・育成に多大な貢献をしている方を国土交通大臣が顕彰し、誇りと意欲の増進、能力と資質の向上を促進するとともに、その社会的評価・地位の確立を図ることを目的として平成四年度に創設された。

今回は436名、本県からは9名が顕彰された。（会員企業からは3名、うち本会からの推薦は2名）

顕彰式では、後藤国土交通大臣政務官より顕彰状と建設マスターを表す徽章が授与された。

本会推薦の受賞者

立原 将裕 高吉建設(株)
佐々木幸平 秋北建設工業(株)

土木建築の近代化遺産

No.49

池田氏庭園

大仙市高梨字大嶋



仙北平野のほぼ中心部、田園地帯にひととき目立つ大きな屋敷がある。山形県酒田の本間家、宮城県丸森町の齋藤家と並ぶ東北三大地主として知られた池田家である。明治時代中頃から戦前まで当主が高梨村長をはじめ秋田県初の貴族院議員や秋田銀行の頭取などを歴任している家柄で知られる。

池田家は明治二十九年（一八九六）の六郷大地震で家屋が倒壊したのをきっかけに耕地整理事業に合わせて屋敷地を拡張。敷地はおおよそ四万二千ヘクタール（約一万三千坪）で、俯瞰する敷地は六角形をなし、池田家の家紋である亀甲桔梗の亀甲になぞらえたといわれる。周囲は石垣を伴う堀や土塁で囲まれている。池田家の庭園は秋田市の千秋公園なども設計した近代庭園づくりの先駆者長岡安平の協力も得て大正年間に完成している。

平成十八年六月十七、十八日の両日、一般公開された日に見学する機会を得た。大仙市教育委員会のボランティアガイドの詳しい説明を受けながら約四十分、庭園内を見学した。

真昼山を正面に望む東側に薬医門の正門があり、エゴノキの花が咲きこぼれる広いアプローチを進むと左手に瀟洒な洋館、右手に米蔵や味噌蔵が立ち並んでいる。中央にある主屋は昭和二十七年の火災で焼失し新しい家屋となっているが、その前にかつての玄関口の礎石が残されている。

平成十六年、秋田県内で初めて国の庭園名勝に指定された「池田氏庭園」。中でも最大の見所は主屋南西側にある主庭園である。日本最大級という笠の径約四メートルという巨大な雪見燈籠とその向かいに建つ鉄筋コンクリート造りの二階建て洋館が目玉を引く。洋館は大正十一年（一九二二）に私設の公開図書館として建てられたもので地域の人々に開放されていたという。破損の目立つ洋館は今後、大仙市が管理主体となり池田家と協力しながら保存整備活用の方針であるという。（取材・構成／藤原優太郎）

平成18年度新規学卒入職者（新入社員）研修会アンケート結果

参加者（回答数）19名

1. 誰の紹介で現在の会社に入りましたか。

項目	人数	(昨年)	%	(昨年)
学校から紹介された	9	(19)	47.4	(61.3)
ハローワーク（職業安定所）から紹介された	3	(3)	15.8	(9.7)
両親、親戚に勧められて	4	(5)	21.1	(15.2)
友人、先輩等に紹介された	0	(2)	0.0	(5.4)
会社から直接接洽があった	1	(0)	5.3	(0)
その他	2	(2)	10.5	(5.4)
（就労前第1次）	1	(0)	5.3	(0)

2. 現在の会社を選んだ理由は何か（複数回答）

項目	回答数	(昨年)	%	(昨年)
会社の将来を期待して	5	(9)	26.3	(28.8)
土木・建築に興味があった	12	(14)	63.2	(71.1)
家業が建築業である	0	(0)	0.0	(0)
技術・技術者を習得したい	11	(17)	57.9	(34.8)
自分の能力・個性を生かせる	6	(4)	31.6	(12.9)
労働時間・休日が多い	1	(0)	5.3	(0)
給与・賞与が良い	2	(2)	10.5	(6.0)
家の都合で近所に働かなければならない	3	(6)	15.8	(16.2)
他に働くところが無かった	1	(3)	5.3	(9.7)
その他	3	(8)	15.8	(19.4)
（自宅に近い）	2	(0)	10.5	(0)

3. 現在の会社でいつまで働きたいですか

項目	回答数	(昨年)	%	(昨年)
定年まで	5	(10)	26.3	(22.2)
条件が状況次第で転職	7	(9)	36.8	(29.0)
会からない	7	(5)	36.8	(16.1)
将来は独立希望	0	(4)	0.0	(12.9)
技能や経験を付けたら転職	0	(0)	0.0	(0)
結婚・出産後も出来るだけ長く勤めたい	0	(3)	0.0	(9.8)
結婚・出産を機に退職	0	(0)	0.0	(0)
その他	0	(0)	0.0	(0)

4. 建設業についてどう考えていますか

項目	回答数	(昨年)	%	(昨年)
社会に役立つ職業と思う	15	(15)	78.9	(38.4)
責任が重く、働きがいがある	14	(14)	73.7	(38.2)
職業は3K（安全、明るい、夜間）で活気がある	8	(3)	42.1	(8.7)
仕事がハードで苦痛が多すぎてつらい	5	(4)	26.3	(12.9)
職業として好きでない	1	(0)	5.3	(0)
その他	0	(3)	0.0	(9.7)

5. インターンシップに参加したことがありますか

項目	人数	(昨年)	%	(昨年)
参加したことがある	18	(23)	94.7	(74.2)
参加したことがない	2	(8)	10.5	(25.8)

6. この研修は1日半の研修でしたがどうですか

項目	人数	(昨年)	%	(昨年)
長かった	5	(6)	26.3	(19.4)
短かった	3	(7)	15.8	(22.6)
丁度良かった	11	(18)	57.9	(38.0)

情報コラム Vol.3

男女共同参画の取組を評価

秋田県 男女共同参画職場づくり事業

秋田県男女共同参画課では、7月1日より男女共同参画職場づくり事業を実施、男女共同参画の取り組み状況に対し、入札参加資格審査において加点します。

同事業では始め、県の入札参加資格登録をする事業者を対象に「男女共同参画職場づくり調査票」を配布、職場環境づくりの進捗状況を調査します。（調査票の提出は8月末まで）

県では、調査の結果、(1)女性の登用、(2)両立支援対策、(3)女性の活用方針、(4)セクシュアル・ハラスメント対策の4項目のうち2項目以上の該当があれば入札参加資格審査において加点することとしています。

また、調査票の点検・統計後、取組事業所への訪問調査の実施を経て、加点事業所への確認証の交付、建設管理課への加点対象事業所の通知を行うこととなっています。

実施要項、調査項目の詳細、事業の流れなどの詳細は本ホームページ「会員専用」にてご案内しております。

出口論 ＜古新聞・特産野菜・間伐材＞

あゆかわ のぼる

仕事柄各種の新聞を読む。出版社のPR雑誌以外の定期購読の雑誌はないが、必要に応じて多くの雑誌も買い込む。同人雑誌を中心にいろんな雑誌や印刷物が送られて来る。書類が届く。

同人雑誌を除けば、それらのほとんどが数日、ものによっては数十分で役目を果たし終える。どうなるかという、紙屑として処分するしかない。紙屑として溜まる量は並ではなかった。

しかし、一方でちり紙交換車がよくやって来てくれたので、処理に困ることはなかった。

それが、やがてちり紙交換車の来る頻度がどんどん少なくなって、家の中に紙屑の山が出来始めた。

どうしたかという、まず新聞をやめた。

三紙取っていた全国紙を一紙にし、政党紙をやめ、経済紙は時々図書館に出掛けて目を通し、雑誌も吟味して買うようにした。週刊誌はかつての百分の一ぐらいに落ちた。

思い切って紙屑を発生させないようにしたのだ。

次に、ちり紙交換車に出来るだけ来て貰う作戦を立てた。こっちがサービスを始めたのだ。冷たい飲み物や、冷やしてある栄養ドリンクを出したりした。その効果が定期的に来てくれた。

ところが、今年に入ってパタリと来てくれなくなった。

人に聞いてみたら、「需要が少ないからじゃないか」と言う。再生した商品が売れない、ということだろう。日本人は無意味な贅沢をして、再生商品を使わないのかしら。そう言えば、いつかテレビで、そんなことを言っていたような気がする。

役所あたりがせっせと使い、民間にも使うことを勧めればいいのに、と思う。再生に高いコストがかかり、値段が高くて税金を使い過ぎるということがあるとしても、そのことに国民は文句を付けないと思う。他の無駄遣いに比べたら、ね。

消費が多くなり、需要が増すと、コストは下がる。

貧者の一灯のつもりで、一応、紙の消化の比較的多い仕事をしているものとして、分かれば必ず『再生』と書いてあるものを使うと心掛けていた。

結局、故紙を集めるのと同じか、それ以上にそれを消化する、所謂出口をもっと広げ、活性化することに役所は力を注ぐことが大事なのではないか。

それに似たことで、農業。

以前よく、賢妻の知り合いから、ある年はホウレン草を、別の年にはピーマンを、と夫婦二人ではとても食べきれないほどの量の野菜が届くことがあった。農業をしている友人が、遠くからわざわざ、野菜をどっさり持って来てくれることもある。

それらは、町役場とかJAが奨める“特産品”らしいのだ。

そして、いずれも自分の畑から採って来るのではなく、JAかどこかから買って来る、と聞いたことがある。

どうということかという、役場の奨めで、補助を受けて野菜を作る。収穫した物をJAに納める。売れ残ってしまうと、それをJAの職員とか栽培農家に売り付ける。処分に困って親戚縁者、友人知人に配る、という訳だ。不思議な話だ。

よくテレビなどで、大量のキャベツや白菜などをブルドーザーで踏み潰している様子を見る事があるが、あれも、豊作と需要不足というアンバランスから来る値段の暴落を防ぐためだと説明される。今年は、牛乳を捨てている様子も見た。

ああいう風景を見ていると、人間はいかに愚かな動物かがよく分かる。勿論、愚かなのは農家ではなく役所側の方だけだ。

私は、全く事情を知らないまま、「その野菜や牛乳を、必要としている地方、あるいは国や地域があるはずだ」とか、「加工したら需要があるのではないか」という思いにかられる。そういうことを、公の場で言ったこともある。

野菜作りについては農家はプロだ。極論を言えば、特に技術指導も補助もなくとも十分いいものを作れる。問題は、それがどうすれば売れるかで、需要の安定的な確保こそ、疎くて頭を悩ますことだろう。そこに手を差し伸べてやるのが、行政とかJAの役割なのではないか。

これも出口の問題だ。

もう一つ行ってみようか。

秋田杉の問題。間伐材のことだ。

秋田杉は、ハタハタと共に、良いに付け悪いに付け、秋田県の屋台骨的な財産だ。その秋田杉がうまく育ってなくて、その最大の原因が間伐が思うに任せないことだという。

密生しているの、日が当らず風通しが悪く、思うような状態での成長が出来ないでいるらしい。

これは、植え方に問題があったのではないかとわれ、秋田市の山林経営者、佐藤清太郎さんが、それを克服する植林を始めていると聞いたことがあるが、それはこれからのこと。問題は、今、植えて二十年から三十年の秋田杉は、間伐が進まなくて、日光浴と酸素不足で氣息奄々らしい。そして、それらしい手当てはほとんどされていない。

そして、その理由として、役所などの関係セクションでは、「山林労働者の不足」とか、「山村地域の過疎化」などをあげ、あるいは、「間伐材の使用ニーズの変化」とか、「外材に押されて」とか、「コスト高」などを列挙する。

そんなことは素人でも分かっている。しかもなお役所の言う台詞ではない。それをどう打開するかを考えるのが仕事のはず。

「昔は土木工事の足場に使ったものだが、今は鉄パイプになった」と泣き言を言ったって何の解決策も生み出せないし、「間伐にかかったコストを木材価格に吸収出来ない」と言ってみてもどうにもならない。

ここでも故紙や野菜と同じで、入り口対策と出口塞ぎ論で立ち往生している。

大事なのは『出口充実』対策だ。

間伐材の利用方法を抜本的に考え直すこと。

例えば、県が全国に向けて『間伐材利用方法コンテスト』のようなものを企画し、思い切った賞金を出して募集する。うまいアイデアが出たら、新しい特産品が生まれたり、産業が生み出されるかもしれない。

舗道のウッドブロックだって、どこかでチョコチョコやるのではなく、大々的に、全県規模でやればいい。県庁や市役所のある山王一帯や、今一番話題の中央街区、空港や秋田駅前、地方振興局周辺などをウッドブロックにしたら、県外から来た人たちがびっくりし全国に広まる。他県、特に首都圏がその気になったら大市場だ。コストはすぐ下がる。

ペレットストーブだってそうだ。いろんなところに補助を出しているのだから、ストーブ購入者に補助すればいい。そうするとペレットが売れて、間伐材の需要が大きくなる。

需要が大きくなると当然供給源が沸き立つ。そうなれば働く人も集まる。

これもまた出口の問題だ。

こんなことを言うと、必ず出て来るのが、「ストーブ業者やペレット製造業者個人に補助を出してはならぬ」という横槍が入る。あるいは、役所が先取りして懸念する。後進県秋田の風土病である『足ふっぱり病』だ。

そういう業者を育成することが、起業意欲を刺激して、地域と人々を生き生きさせる。

人間と同じで、出口が爽快だと、全身がイキイキする。

入り口のことを考えるよりずっと難しいが、最も大事な出口活性化をみんなで論じよう。